



唱歌「蝶々」(『小学唱歌集 初編』1882年第17)の楽譜

出典：文部省音楽取調掛編『小学唱歌集 初編』(文部省、1881年) / 国立国会図書館所蔵

ロシアの島々に行った時、どこに行っても聞こえてくるのは讚美歌ばかりだったのです。でもそれは彼の研究対象ではないわけです。彼にとっては讚美歌というのは自分が知りたい音楽、つまりミクロネシアの島々に昔からあった音楽、すなわち讚美歌が伝わる前にあった音楽を消してしまうものだったのです。ですから、自分の研究の邪魔になる音楽、恐らくそんなふうに思ったでしょうね。少なくとも彼の研究対象にはなっていません。

ですから私のやっている研究は民族音楽の研究でもないわけです。そのように言うことはあまり好きではありませんが、新しい研究と言っしかないかもしれません。あるいはインターディシプリン (interdiscipline) という言葉があるんですが、学的と訳しますが、ディシプリンというのは学問の領域のことです。インターはインターナショナルとかのインターですね。かみ砕いて言えば、学問の垣根を越えた学問、学問の垣根をまたぐ学問、ということですね。私の研究は、音楽を対象とする様々な研究の垣根を越えた研究、そんな風にしか言えないのではないのでしょうか。

§7 「蝶々」の場合

―なるほど、学問の垣根を越えた新しい音楽研究ということですね。

でもあまりそのことは強調しないようにしています。教育大学にいる研究者です

LIGHTLY ROW.



72 Sabbath School Song.

1 Sabat skul, Sabot skul,
Ajiri emon katak,
Hwa in naa, roa in naa,
An Jowa wot.
Misonere katakjin,
Kim kooan kooan emon,
Kim katak, kim katak,
Katak emon wot.

2 Kim mattek, kim mattek,
Maton jar son Jowa Krist,
Jowa roa, Jowa roa,
Ewa anij kabon.
Kim kooan si son Eton,
Al emon im wijak Tak,
Emon si, emon si,
Al son Jowa Krist.

3 Kim twij, kim twij,
Kim twij ho emon;
Ho loa, ho loa,
Jikim emon wot.
O Jowa kwon kaisemen,
Kaisemen wot berasen;
Kim kooan her i loa
Kabon son Jowa.

73 Wedding Hymn.

1 Kim mattek, kim mattek,
Maton jar in bebele;
Bwa Anij e kooan
Kim jar kim men in;
Anij wot e ar kooan.
Man im kooa kim emon;
Ber jemair im jinsir,
Dreij wot belez.

2 O Jowa kaisemen,
Kaisemen wot berasen;
Lala it, im anikir,
Im anij;
Kwon Jibon ir kim emon,
Kim belete naa ho An,
Naa im too her beir,
Kooanoo it.

3 Emon si, emon si,
No anij rej bebele,
Bwa emon air kooan,
No rej bebele.
Emon yokuwa ho naa,
Im har sinwet ho boot
Yokuwa droon, yokuwa droon,
Yokuwa in dria.

マーシャルの讃美歌集「Buk in al kab tun ko」(1891年)に出てくる「蝶々」の旋律
 出典：Buk in al kab tun ko n o n ro dri aill[n in Marshall [microform](1891) New York:
 Dri jeje im ko mo ne The Biglow & Main Co., 1891. / Bishop Museum 所蔵

からね、音楽教育史の新しい研究、という説明
 にしておきます。

—では、話を元に戻しますが、唱歌誕生が奇
 跡だったとします。例をあげてそのことをもう
 少し具体的にお話したいだけだと分かりやすい
 と思います。

そうですね、私がこのことを説明する時よく
 使っている唱歌があります。年配の方も若い方
 も同じようにご存知の「蝶々」という唱歌です。
 「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ」という歌です。
 日本でも百年近く歌われている歌です。

この古い歌をアジア太平洋全体の中で眺めて
 みます。日本の蝶々はアメリカから入ってきた
 わけですが、実はこの同じ歌がミクロネシアの
 島には讃美歌として入ってきています。時期も
 日本に入ってきたのとはほぼ同じです。西暦で言
 いますと一八七〇年代です。

—そうなんですか。日本に入ってきたのと同

じ時期に「蝶々」はミクロネシアの島に讃美歌として入った、ということですね。

はい。歌詞はですね、日曜学校、キリスト教の家庭の子どもたちが日曜日に教会に集まって一種学校のようなことをしますが、その日曜学校のことを歌った子どもの讃美歌であつたりしました。

少し専門的な話になりますが、当時ミクロネシアの島々を一つの船が巡航していました。他に交通手段がありません。その船の名前は暁の星というのでしようか、モーニング・スター号というものです。これはキリスト教を布教するための団体、伝道団といいましょうか、その伝道団の自前の船で、伝道のための専用の船なんです。それは宣教師を運んだり、手紙や他の郵便物を運んだり、宣教に必要ないろいろなもの、物資、食料から建築資材まで運んだのですが、それがハワイを出発して半年くらいかけてミクロネシアの島を順々に回ってゆきます。島の人たちにとって船はとっても楽しみなのです。新しい宣教師が来たり、外から新しいものを持ってきたり、新しい本が届いたり、いろんな珍しいものが届く、印刷機が届くとかですね。港の沖合にモーニング・スター号の船影が見えることはとっても嬉しいことで、待ちわびていました。

そして、子どもたちはそのモーニング・スター号がやってきた、という喜びの讃美歌を歌いますが、それが日本の「蝶々」の旋律です。日本だけを見ていると「蝶々」はアメリカの学校にあつた歌が日本にやってきて日本の学校の歌になった、そういう

関係しか見えない。太平洋にまで視野を広げると、同じ歌が讃美歌として実は日本だけでなくアジア太平洋に広く普及していたことが分かり、その一つが日本の「蝶々」なのです。

日本の場合は「蝶々」という言葉から分かるように、讃美歌の旋律に日本独特の伝統を踏まえた歌詞をつけることによって唱歌という新しい歌を作り上げました。ところがハワイやミクロネシアではそういうことは起こらなくて、讃美歌としてきた歌はあくまで讃美歌として歌っていきました。こういうのを見てみますと、唱歌という歌は本当によく出来た歌だな、よく生まれてきた歌だな、と感じるわけなのです。

§ 8 アジア太平洋の讃美歌と唱歌

——「蝶々」の他にも同じような例はたくさんあるのでしょうか。

おっしゃる通り、問題は「蝶々」は特別な例なのか、それとも同じような例が他にもたくさんあつて、「蝶々」は典型的な例なのか、ということ です。結論から言いますと、「蝶々」は決して例外ではなく、同じような例がいくつでもあります。

日本で最初に作られた音楽の教科書である『小学唱歌集』を取り上げてみます。これは初編、第二編、第三編の三冊からなる教科書ですが、初編は一八八二年、明治十五年に出ました。その中にすでにいくつかの讃美歌の旋律が出てきます。有名